

第 119 回 有田国際陶磁展
美術工芸品・オブジェ部門 審査評

審査長 花里 麻理

2023 年の春、コロナ禍の今後を軽々には言葉にできないところではありますが、それでも私たちの気持ちは、長く続いた耐える時間を終わらせて、前を向きたい気持ちに満ちています。そのような明るい気持ちを心に抱きつつ、第 119 回有田国際陶磁展がこのたび実施されますことを心からお慶び申し上げます。

今回の美術工芸品・オブジェ部門の応募は、前回から 27 点増えまして全部で 107 点を数えました。この数字は、第 116 回の 109 点、第 117 回の 102 点に近く、コロナ禍前の水準に戻ったと言えるように思います。

審査には 3 名の審査員があたり、一次審査は各審査員が 30 点ずつを選ぶことからはじめ、合議を経て 73 点の入選作品を決定いたしました。二次審査では、一次審査の得票数を踏まえ、合議の上、授賞候補作品 17 点を選出し、15 点の入賞作品を決定いたしました。いずれも素材や形への探究心に満ちた創意あふれる見応えのある作品です。

第一席の文部科学大臣賞を受賞した澤山大亮さんの《天目線文彫鉢》は、天目釉の力強さと優美な形状とを見事に組み合わせた作品です。鉢の外側にほどこした彫文と線文とが天目釉の表情にリズムをもたらしています。その一方で、見込みには細やかな結晶が茫洋と広がり、宇宙を感じさせます。

第二席の佐賀県知事賞を受賞した庄村久喜さんの《白妙彩磁鉢》は、内側から光を発しているかのように見える独特の光沢感を持つ作品です。器の内外にほどこした彫りの深さを絶妙に変えているため、光と影の表情が複雑みを持って冴え、四方にアクセントをつけた形状と調和しています。

有田町長賞を受賞した増原嘉央理さんの《紅白鮮 水影 -2302-》は、ゆったりとした鉢の形状を細かな紅白の模様で覆っています。水面を照らす陽光のきらめきを紅白に見立てた大胆さも見所です。

有田商工会議所会頭賞の赤塚幸恵さんの《白磁釉内彩鉢》は、青のグラデーションと銀色の点描を丹念にほどこした優しげな印象の作品です。この控えめな表情が審査員の心を掴みました。

審査は、難しくもありますが、出品者の方々の創意工夫に出会える、またとない貴重な時間です。入選、入賞の方々が、素材の魅力や制作過程の高揚感を形にまとめあげた成果を、ぜひ、展覧会で皆様にご覧いただきたいと思います。次回も充実した公募展になりますよう願っています。

審査員名簿

美術工芸品・オブジェ部門

(50音順・敬称略)

氏 名	所 属	備 考	推 薦 者
カノウ ミチオ 叶 道夫	日展特別会員 日本新工芸家連盟 副理事長	日 展 特 別 会 員	京都市山科区 前田泰昭
キムラ ヨシロウ 木村 芳郎	日本工芸会 正会員	日 本 工 芸 会	広島県東広島市 今泉今右衛門
ハナザト マリ 花里 麻理	茨城県陶芸美術館	評 論 家	茨城県笠間市 今泉今右衛門